

艦娘無職小説合同誌

横須賀ハローワーク(Preview)

この書籍は、

『艦隊これくしょん——艦これ——』©2015 DMM.com POWERCHORD STUDIO/C2/KADOKAWA』
を著作元とした二次創作物です。

本書についての文章責任については本サークル「鎮守府労務局」にあります。本書について、
原著作者にお問い合わせする事の無きようお願い致します。

また、本書の内容は著作者表示等を除き全て創作です。実在する人物・事象・名称・商標等と
は一切の関係が無い事をご了承願います。

本書の全ての内容の著作権は本サークル「鎮守府労務局」にあります。本サークルの許諾範囲
を超えて本著作物を複製・公衆送信・頒布・展示・貸与・譲渡・翻訳・翻案することを禁じます。

©2016 Chinjufu Romukyoku All rights reserved.



第一報告書

(著・長串望)

No More Work!

ある朝、夢も見ない静寂から目覚めた駆逐艦望月は、自分が生産性のない無職になっていることに気づいた。

起き抜けで事態を理解したのち、「なんてこった」、「まじかよ神様」、「こんなのつてないぞ……ネオヨコスカいい加減にしろよ……」としばし現実逃避するようにぶつぶつと呟いてはもはや誰も居なくなつた鎮守府をうろついていたが、そもそも自分が元から生産性のない穀潰しであつたことを思い出して、なら仕方ないかと望月は諦めた。

望月が目覚めたのはかつてはネオヨコスカ第二十二鎮守府と呼ばれていた施設の、当時から誰も意識することのなかつたような営倉ドックの片隅だつた。誰もが大真面目に深海棲艦と戦争している最中、望月は生涯のかんりの時間をその営倉ドックで過ごした。と言つてもその間の事は記憶にないので、あまり親しみはない。

精神凍結というのが望月への罰で、処置だつた。その罪は職務怠慢であつた。

深海棲艦と見れば途端に修羅の如き闘志を滾らせる艦娘達の中であつて、望月は例外だつた。何しろさつぱり闘う気が起きなかつた。はつきり言つて働きたくなかつた。暖かい布団の中で一日中微睡んでいたかつた。命令されるので仕方がなく艦隊について行つて戦線には出たが、おぎなりに魚雷を放り、他の艦娘に合わせる様に碌に狙いも定めず砲を撃つては、大した戦果も上げずやれやれと肩をすくめて帰つてきて、もそもそと飯を食つては布団に籠るような生き物だつた。提督はこれを良しとしなかつたし、運営本部は処置を求めた。なにしろ戦時だ。働きもしない穀潰しを遊ばせておくわけにはいかない。とはいへ製造過程の何処にバグがあつたものか、この望月とにかく働きたがらない。このポンコツ一隻を修理するなり躰けるなりにかかる費用と時間を考えれば、もう一隻建造して運用した方が余程に安上がりだつた。かといつて望月の……

第二報告書

(著・山峰峻)

私^{うち}に赤紙が来た日

言え……。

とツブしが効かなくなるよ?」

「そう言われても、そこまで好きになれる人もいないし」

面接まで行ったんでしょ？」

「……………」落ちた」

じゃ心配よ。努力したらうまくいくものじゃないとは言えねえ」

「……分かってる」

ると言うならまだ格好が――」

「母さん」

と軽い溜息をついて母親を見た。

「やめよう、飯が不味くなる」

第三報告書

(著・イワンウイリ)

間宮の手

三 間宮の手（抜粹）

初めて自分が人を笑顔にした記憶が少女にはある。それが客観的な事実であるかは置いておいて、少女にとってそれが初めてあったのは間違いない。幼い頃、朝食を両親につくってみせた。つくっている時、母親が少女に心配そうな目線を向けていたが、少女はそれに気がつかないほど調理に集中していた。白米に味噌汁に漬け物に焼き鮭。拙い手つきとたどたどしい手順でつくりあげたのはなんてことのない和朝食だった。父親は一品一品を盛りつけが綺麗だの、まっすぐ綺麗に切れているだのひたすら誉めちぎった。何をそこまで、と少女が幼心に思うほどだったが、喜びで満ちた父親の顔を見ると、何も言えなくなった。母親は美味しいわ、と少女の顔を見て柔らかな微笑んだ。それで降何か言葉で誉める事はなかったが、一口食べる度に母親が優しく微笑むのが嬉しかった。少女の人生が決まったのはこの朝だったのかもしれない。

その日から二十と余年が過ぎた。少女は炊烹を生業としていた。艦娘として間宮の名を持ち、鎮守府で同じ艦娘や工廠兵や主計課員を相手に食事を用意するのが間宮の仕事だった。世間からすればこれは仕事と括られるが、間宮にとっては生きる事そのものだった。

間宮の右手に握られた包丁がじゃがいもの皮を薄く剥いていく。今日の献立は玄米ご飯とじゃがいもとたまねぎの味噌汁に鰯の照り焼き、ほうれん草のおひたし。沢山の人の食事を用意するのは楽な事ではない。調理行程に無駄があつてはいけなし、手を早くしなければならぬといつて食材に無駄があつてもいけない。早く、正確に、美味しく。その三点を極めようとする厨房は戦場の様相を表す。その厨房を実質一人で切り盛りする間宮はまさに一騎当千の軍神だった。そんな間宮だったが、その心うちには決して戦いだの神だのそんな言葉はなかった。喜んでもらいたい。ただ純然にその思いしかなかった。その純然さが目利きを上達させ、包丁捌きを冴えさせ、盛りつけを美しくさせた。

第四報告書

(著・がたはし)

下野に下野

.....
絶対にあれこれと心配されるに違いない。外に遊びに行くときには熊野にティッシュとハンカチの有無を確認され、鈴谷に財布のチェックを受け、三隈にそれらを用意してもらうのが最上である。もはや長女の威厳はない。しかし、これ以上心配をかけるのは最上の良心が痛むのも事実だった。

「はい天井ね」

と、思案にふける最上に声がふつてきて、ほんと天井が置かれる。

目の前にあるのはほかほかと熱気のけむる天井である。エビのしつぽの赤らんだところが熱い油でひりひりとしているのが、いかにも美味い天ぷらという風情で良いし、甘しよっぱいぞと言わんばかりのタレの匂いが好ましい。エビ、穴子、ナスにキス、それにシシトウとサツマイモが置かれてみっちりとしている。そして真ん中にはこれ見よがしに半熟卵の天ぷらである。さすが高いだけある。最上は内心ウキウキとしながら割り箸を割った。

箸をとって天井をむしやむしやとやりながら、自立しようと最上は思った。次に何をするのか決めるまでの間、一人でしっかりと生きていきたい。そうすればこうやって美味しいものも一人で食べに来ることができるし、「天井ひとつで二千元!？」なんて鈴谷に叫ばれることもない。そろそろ心配されずにお外に出ようと決心したのだ。

よし、と決めてから最上の行動は早かった。ひとまず妹たちには嘘でもついておこうと決めた。どこか遠くで山奥っぽいところで、とても顔を出してやろうとか思えないような場所に行くともいえば、さすがに妹たちも諦めるに違いない……そう思いながら、最上は熱々のエビをむしやりと食べた。

第五報告書

(著・ぬかてい)

私への遺書

五 私への遺書（抜粋）

（註・色々書かれた形跡はあるのだが、このページは大半が滲んで読めない）

第六報告書

(著・いなんず)

大井っち、秘書やめるってさ

「解体後の処遇は二つあります。一つ目は、文字通り解体する。二つ目は、艦娘から解放する」
任務さんはそう言った。

「一つ目の『解体』。この場合、魂は艦娘カイド式札の中に残り、永久に眠ることになります。その魂が取り出されるかは解りませんし、鎮守府が解体された時は、そのまま魂ごと茶毘に付されると考えられています。つまり、事実上の安楽死です」

あたし
私は息を飲んだ。

「二つ目の『解放』。この場合は、普通の人間とは肉体は違うものの、人間としての基本的な権利が与えられ、人間として生活する事になります。人間としての権利があるため、『解体』は自殺幫助となってしまう、二度とできなくなります……」

「……基本的には練度に応じた月数の手当が発生します。あなたの場合は……半年ですね」
先されて、艦娘扱いはできなくなると言うことなのか。

「……まあ……すぐ辞めるんじや、そんなもんかなのかなあ？　ちえ。」

「それで、いまから、説明しにくいことをお話します」

「はい？」

私は首を傾げた。わざわざ前置きしてまで言う？

「実際のところ、元艦娘の生活定着率は高いとは言えません。多くは収入に問題を抱え、艦娘年金が途絶えた直後に生活保護の申請を行っているため、鎮守府では現在『解放』について特別な理由がない限り許可していません」

「え」

第七報告書

(著・長串望)

人魚は歩けない

時折、無性に苦しくなったり、妙な焦燥感に苛まされたりするが、しかし結局何が出来るわけでもなくじつと夜空を眺めて堪えていると、今度は段々と虚しくなると、胸の中から色々垂れ流されてしまつて、陰圧で満たされる。自分の体をきつく抱きしめてもどうにもならないもどかしさがある。そしてそれさえも、じつと蹲っていると段々とどうでもよくなつてきて、その繰り返した。何かしようと思ひながら、何にもできず、どうにかしようと思ひながら、どうにもならず、考えるとも考えないとも言えないただ無暗に悶々としたまま夜空の方を眺めていると、やがて東の方が白々としてきて、朝が来る。その頃になつてようやく疲れ切つて横になるか、かえつて目が冴えてしまつてそのまま起き通しでいるのだった。そんな生活を、三か月ばかりしていた。

やがて夏が近づいて暑くなつてくる頃、ひよつこりとあいつは顔を出した。

習慣じみて昼頃起きだし、惰性で歯を磨き、顔を洗つた後シンクを眺めながら無為に時を過ごしていると、大抵昼過ぎごろにユーが顔を出すようになった。

「でっちー。おひるごはん、できた、よー」

「でっち言うなでち」

かつて遙々ドイツからやつてきたUボートは、ろくでなし潜水艦共に揉まれて早々に初々しさを捨て去り、先輩の再三の叱責をシカトぶつこくふてぶてしさを獲得し、そして無駄飯ぐらいの判を押されて仲良くボロアパート入りのだった。

何時頃からだったかちよつと記憶が怪しいが、何かの折に昼飯を一緒にすることがあつて、それ以来ドイツ仕込みの几帳面さなのか、毎日同じ時間に昼飯を作つてやつてきた。別にいらなさと何度か言つただけれど、一人分作るより二人分作る方が楽だし、何より長らく食堂で騒ぎながらご飯を食べていたので独り飯は寂しいと甘えたことを言つてくる。先輩としては無碍に……

艦娘無職合同

横須賀ハローワーク (Preview)

著

鎮守府労務局

ks_helloworld@yahoo.co.jp

<http://alphabets.form-of.xyz/NewsFlash-Helloworld.html>

代表

イワンウイリー

編集責任

いなんず

inanzu@gmail.com

発行

2016
年 12 月 9 日

本編刊行予定

2016
年 12 月 29 日
C91 一日目・東 1 ホール
F - 57b